

伝統満族集落における街路構成と宅地割の関係 - 中国・新賓満族自治県勝利村の事例研究その1 -

満族
宅地割

集落空間

街路構成

正会員 ○楊 丹*
正会員 牛島 朗**
正会員 中園 真人***

1. 序論

1.1 背景

中国の少数民族である満族は、現在その半数以上が遼寧省に居住している。中国で第二位の少数民族として民族区域自治が認められており、独自の言語や文化を維持する権利が保証されている。

かつて清王朝を興し 300 年近く中国国内の広範囲を支配した満族は、その居住文化にも他民族の影響を強く受けていたが、独特の居住文化も形成していた。

満族の伝統民家について、これまで様々な調査や文献等を通じ、庭と主屋配置の特徴が指摘されているが、集住体として集落の空間構造を取り上げた研究に乏しい。その為、個々の住居がどのように集落空間を構成し、どのような特徴を有しているのかは明らかになっていない。

1.2 研究目的と方法

そこで本研究は、伝統的な満族民家の残存する新賓満族自治県内の勝利村を取り上げ、ケーススタディにより、伝統満族集落の1つである勝利村の空間特性を明らかにする事を目的とする。具体的には、現在の集落内の土地利用状況を把握するとともに、集落を構成する街路と宅地との関係を統計的に解析し、現状の家屋立地傾向について分析を行う。それにより、街路種別毎の宅地面積・入口位置・家屋配置の特徴を明らかにする。

1.3 風水理論と伝統満族民家

中国における風水思想は「以山为依托，背山面水」（山に引き立て、山に靠れて川に向く）という構成が「藏風聚氣」（風を納め、靈氣を集める）効能が持つとされる。さらに、山に靠れることは靈氣を生み出せ、納めて集めるだけではなく、日当たり良く、寒流を遮ることもできる。「界水而止」「界」は「阻み断つ」、つまり水に向くことは不吉な気を遮断でき、環境を整えて生機を産むという意味である。中国満族は東北地方の山河奥地から生まれ、主に狩猟し遊牧する生活を送る。「近水为吉、近山为富、背山面水」（水に近づくのは吉、山に近づくのは福、山に

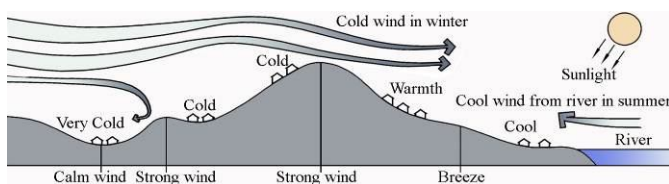


図1 風水断面図

背れて川に向く）という立地習慣が徐々にできた。遼寧省新賓満族自治県にある多くの村落は冬には山に遮られ寒い北西風を避ける。夏には川からの涼しい風を受ける。

早期の満族村落は同一の氏族メンバーが集まり、一般的に 30～80 世帯で構成される。各家の敷地外周で柵を設け、主な役割は猛獣が侵入することを防ぐためである。1780 年朝鮮の学者朴趾源は当時清王朝の皇帝乾隆の 70 歳誕生日を祝うために、「入燕使節団」（燕国使節の身分として）中国を訪れた。彼の『热河日記』の中で遼寧省東部の鳳凰山の辺りにある満族村落の特徴として「敷地は柵で囲まれ、山に靠れて川の隣で築造される。庭が広々としていた」との記述がなされている。

遼寧省満族村落の形成は当地の気候、経済などの影響を受ける。気候は寒冷であり、そして人口密度が低かったとされる。日光を出来るだけ取り入れる為、住居を新築する際に日当たり良い方向に向くことは原則としていた。敷地の入り口はよく南側に設けるため、村中の長い通りは良く東西方向となっている。一方、南北方向の小道はよく補助的な役割を果たす。村内では一般的に 1, 2 か所の寺院があり、村の中心に設けられる。寺院は殆ど清時代の建物であり、主に関帝廟、娘娘廟、土地廟及び城皇廟などである。廟の手前にはよく広場が設けられ、村民集会が行われる主な場所とされる。

伝統的な満族民家は一般的に四角形の敷地形状であり、主屋（正房）と副屋（廂房、苞米楼と索倫杆）で構成される。3-5 間の正房は主要な日常生活の場所とされ、廂房は倉庫や家畜小屋として利用されるが、家族構成により西廂房に居住することもある。苞米楼は収穫後の穀物を保管する倉庫として、普通は木の幹と枝で簡単に組み立てたものであり、高さは地面から約 1m 程度である。庭の東南隅にある索倫杆は「神杆」とも言われ、満族民家の特有の設えとされる。毎年の秋に索倫杆で祭祀儀式を執り行って、天神に祈祷する。

2. 研究対象と調査概要

2.1 勝利村概要

遼寧省新賓満族自治県は中国初の満族自治県で、人口約 32 万人の内満族は 70%以上を占める。勝利村は新賓満

Relationship between street composition and residential area in traditional Manchu village.
Case study on Shengli village in Xinbin Manchu AutoNomous County of Liaoning Province, China

YANG Dan, USHIJIMA Akira, NAKAZONO Mahito

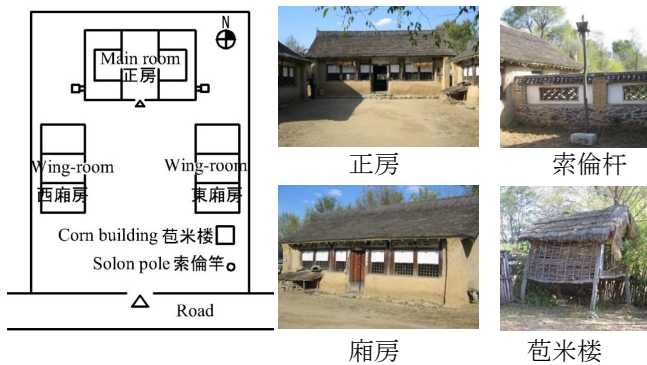


図2 伝統的な満族民家配置



図3 勝利村図と調査対象位置

族自治県下 300 村の一つで、面積 24 km²、人口 1970 人、623 世帯(2013 年)で、内 95%が満族で最も満族が集中する村の一つである。勝利村は 17 世紀初期には赫圖阿拉城^{註 1)} から漢族の要塞(撫順・瀋陽)へ進軍する唯一の要路に位置していた。勝利村の満族人は 17 世紀後期に永陵(清皇帝の先祖墓)守護のため北京から派遣された人々の後裔で、清朝歴代皇帝の墓参途中の休憩場所でもあり、地理・歴史上の重要な村であった。勝利村は大都市から離れ経済発展が遅れたため、民家の新築・建替え時期も遅く数も少ない。1884~1979 年に建設された民家も多く、県政府は伝統満族民家の保護対策のため、万字炕・窩薩庫・跨海煙筒等満族民家特有の特徴を留める「尹登故居」を 2007 年に県級伝統満族民家に登録している。また 1980-1999 年に改修・建替えられた民家、2000 年以降新築の民家もあり、各時期の民家の平面構成の特徴と変容を検討するには調査対象に適した集落である。

2.2 調査方法

調査は、2013 年から 2017 年にかけて行っており、まず瀋陽建築大学図書館と遼寧省図書館での資料収集、県・村政府での満族の由来、現満族民家の分布に関する情報収集、新賓県・岫岩県の 15 村 28 軒の民家に関する写真撮影、建築履歴等に関する聞き取りを行い、その結果をもとに新賓満族自治県を調査対象に選定した。その後、勝利村を対象とした詳細な実測調査を実施し、勝利村の集落空間構成図及び建築図面・家屋配置図の作成、建築履歴や住まい方に関する聞き取り調査を行った。

3. 街路構成と宅地形状、面積

3.1 街路構成パターン

勝利村の街路構成は図 4 の通りである。村道は 4 種類に分けられ、道 I は「罕王路」と呼ばれる。古老な「御路」として、昔には清朝の皇帝が祖先を弔いするために永陵に行く途中に必ず通らなければならない道であった。上夾河鎮政府の包氏によれば、「清時代に罕王路に沿って北側には 5 軒の宿場と 1 軒の寺及び幾つかの軒の官僚宅があった。前世紀 50 年代の土地改革の際に宿場と官僚宅が地方政府に分けられ村民に配られた。寺も文化大革命

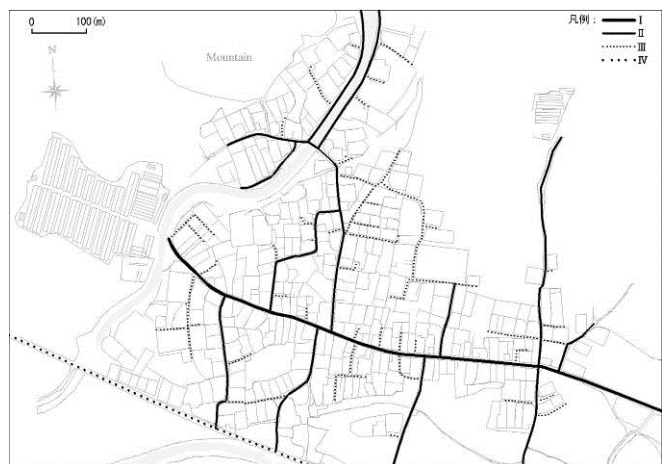


図4 街路構成(I~IV)

の時に取り潰された。」とされる。現在勝利村での罕王路の長さは約 1 km、幅は約 7 m で、村内で最も重要な道とされている。道 II は罕王路から南北に向かって伸びていく多数の道である。かつて村民は道 II に沿って両側に家屋を建設しており、比較的古くから主要な道として機能していたと考えられる。しかし勝利村の村民数増加に伴い、住宅の分布はますます密集する事になる。多くの村民は主路(道 I と II)から離れた場所や農地に家屋を建設するようになり、主な道から奥の民家まで伸びていく幅狭い路地が道 III となる。道 IV は近年、中国政府の政策により整備された村間を繋ぐ幹線道路である。その為、道 IV に沿った住宅は皆新築であり、本研究では参主な分析からは除外している。

3.2 宅地形状の特徴

図 5 より、勝利村での殆どの住宅の奥行(D)は間口(W)より幅が大きい、即ち住宅敷地の形状は長方形となっている。そして D が W の 2 倍以上の住宅も少なくない。一方、少数の横向きの長方形の敷地では W は D の 2 倍を超える事例はなく、表 1 中の D/W 比率の平均値は 1.5 となる。特に道 I の敷地において特徴が顕著に現れ、D/W 比率値は 1.9 となる。また図 5 より道 I の両側の住宅敷地

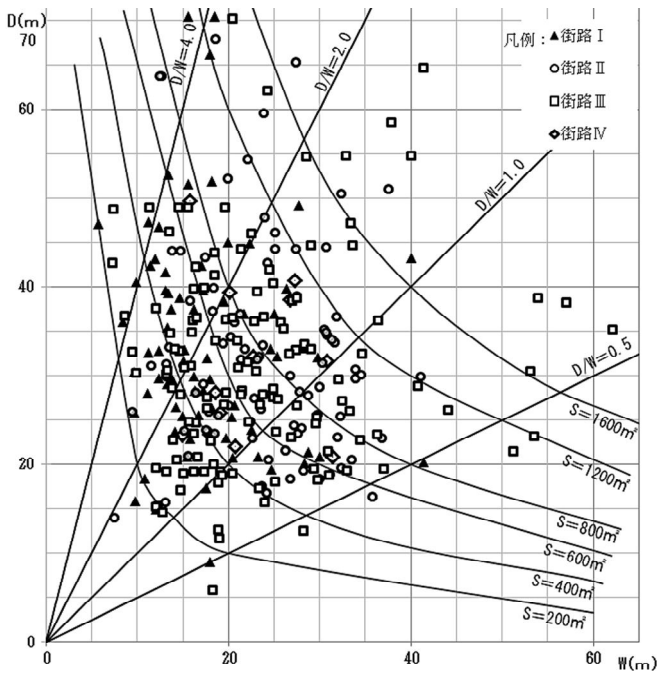


図5 宅地の間口(W)と奥行(D)

表1 宅地の間口(W)、奥行(D)及び面積(S)の関係

	街路Ⅰ	街路Ⅱ	街路Ⅲ	街路Ⅳ	平均/合計	
W 平均値	17.9	23.8	23.6	22.2	22.2	
D 平均値	33.8	32.6	31.2	31.3	32.3	
D/W 平均値	1.9	1.4	1.3	1.4	1.5	
S (㎡)	LO-400	19(25.3)	7(8.1)	31(24.6)	1(8.3)	53(17.7)
	400-600	30(40.0)	22(25.6)	25(19.8)	4(33.3)	81(27.1)
	600-800	7(9.3)	27(31.4)	29(23.0)	4(33.3)	68(22.7)
	800-1200	15(20.0)	21(24.4)	25(19.8)	3(25.0)	64(21.4)
	1200-HI	4(5.3)	9(10.5)	16(12.7)	0(0.0)	30(10.0)
平均	598.1	768.4	749.7	693	719.9	
合計	75	86	126	12	299	

D/W 値は 2.0 より大きな住宅数が約 1/4 を占めている。以上の分析データにより道ⅡとⅢに沿っている住宅敷地の形状は殆ど縦向きの長方形となっているが、形的に極めて細長い事例は限られる。

表1中のWとDの平均値を見ると、4種類の道のデータを比較し道ⅠのW値が最も小さいが、D値が最も大きい、この結果は道Ⅰの両側でできる限り多めに住宅を建てる需要に最も合わせる。その為、清朝に村中での最も主要な建築並び官僚の住宅が道Ⅰに沿って建築された。今までも、寺と多数の店が皆道Ⅰに沿って設置されている。そして毎月の定期市もここで行われている。

本論文では勝利村の宅地面積を5段階に区分する。それらはLO-400, 400-600, 600-800, 800-1200, 1200-HIである。表1の面積統計データ(S)より、道Ⅰの宅地面積は600㎡より小さい民家が最も多く、道ⅡとⅢの宅地では面積は400~1200㎡間の民家数が殆ど同じとなるが、道Ⅱの宅地面積は400㎡以下の数が、道Ⅲの1/4より下回っている。図6からこれらの小面積の民家は比較的村の中心部に集まっている状況が分かる。各種類の道の平均面積の統計データにもこの趨勢も反映されている。特に、道Ⅰの宅地の平均面積は最も小さく598.1㎡となっている。つまり、道Ⅰに接道する家屋は比較的小規模かつ高密度に分布している事が分かる。一方、道ⅡとⅢの敷地平均面積は道Ⅰより大きく、それぞれ768.4㎡と749.7㎡となる。全体的には、村中での敷地面積は1200㎡以下に集中している。中では400~600㎡間の数が最も多い、1200㎡以上の住宅は減多に少なく、図6よりそれらの大面積の住宅が主に勝利村の周辺部に分布していることが分かる。

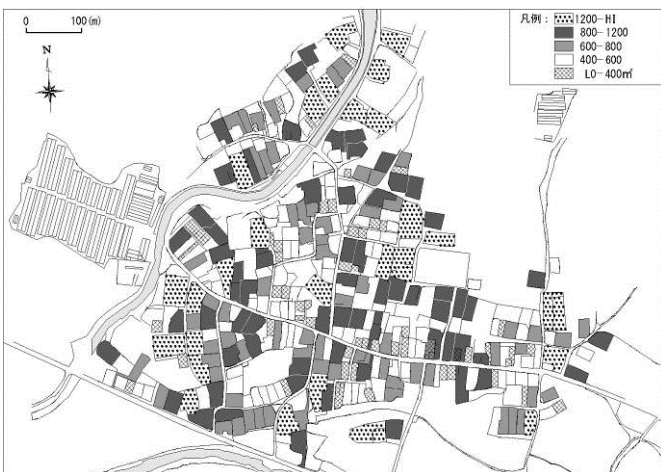


図6 宅地面積分布図

のD/W値は2.0より大きい事例が、D/W値1.0~2.0の民家と比べ数的には僅かな差しかなく、D/W比率値は1.0より低い民家の数は極めて少ない。道Ⅰの民家の中で、敷地の形は細長いタイプがより多いと判断される。道ⅡとⅢに沿っている敷地のD/W比率値は1.4と1.3になり、図5よりD/W値は1.0より大きい住宅数が3/4を占め、

4. 道路条件と門及び正房入口の関係

本論では勝利村の宅地接道条件と門及び正房入口の関係でS、W・E、N1、N2という4型、11モデル(図7)に分類できる。この中で宅地の南側が道に接し、門も正房入口も南側に設置する民家(S型)の数が最も多く、約59%を占める。多数の民家は道の北側に建てられていることが分かる。モデルSW-SとSE-Sにより、民家が東西方向の道と南北方向の道が交差している箇所にある場合に宅地の門は多くの場合南側に設置されている。宅地の北側が道に接する民家(N1型、N2型)は少なく15%程度であるが、その多くが街道に面している。ただし、正房入口が北側に設ける民家(N2型)の数は、さらに少なく全体の4%にとどまる。つまり村内96%の民家は昔から正房の入口が南側に設けるとの伝統的な特徴が維持されていることが分かる。

宅地の北側が道に接するN1型とN2型のデータにより、宅地が北側の道だけに接する民家(モデルN-N・SとN-N)計39軒がある。宅地が東西方向の道と南北方向の道と交差している箇所にある12軒の民家(モデルN・W・W・

	S-S	SW-S	SE-S	Other	Total
S	137	23	14	3	177
W・E	31	7	32	6	76
N1	27	3	1	2	33
N2	12		1	0	13
Total	207	33	48	11	299

図7 宅地接道条件と門及び正房入口の関係

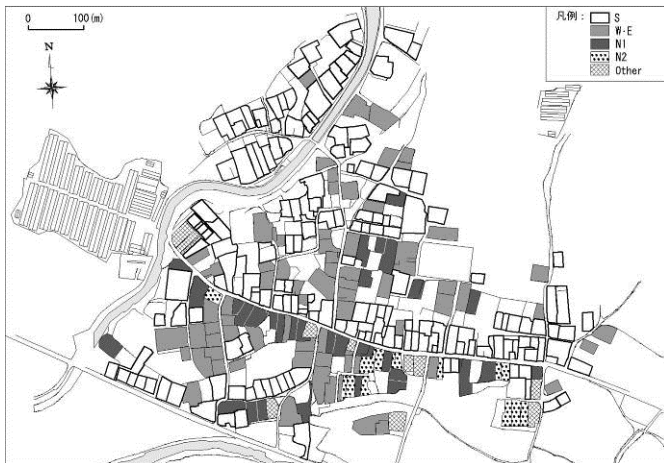


図8 類型分布地図

S、N・W-N・S、N・E-N・S、N・E-N) の中で門が北側に設けられた民家は5軒で、宅地門ができる限り北側に設けることを避けていることが分かる。

宅地の西側又は東側が道に接する民家(W・E型)が約25%を占めている。図8よりこれらの民家が主に道IIの両側にあるため、門の位置が接道する方向にしか設ける事が出来ず西側又は東側に設けられている。

5. 家屋配置形態の分類

本論では各宅地にある主屋と副屋の位置と数の違いに基づき、勝利村の民家の家屋配置をI、II、III、IV、Vという5つの型に分類できる。I型は1軒のみの主屋を有する。II型は1軒の主屋と1軒の副屋を有する。III型は1軒の主屋と2軒の副屋を有する。IV型は1軒の主屋と3軒の副屋を有する。V型は2軒の主屋を有する。

表2により間口(W)と奥行(D)の平均値を見ると、5つの型のW値に大きな差は見られない。一方、I型のD値が最も小さく26.5となり、V型のD値が最も大きく43.1となる。D/W値からI型の宅地形は正方形、V型の宅地形は奥行の長さは間口より2倍長い長方形となっていることが分かる。面積(S)の平均値から、I型とIII型の面積は殆ど同じで約600㎡となる。IV型とV型の面積が

表2 配置パターンと間口(W)・奥行(D)及び面積(S)関係

配置モデル	I	II	III	IV	V	0	平均/合計	
モデル								
W平均値	23.2	21.3	21.2	25.6	23.1	27.6	23.7	
D平均値	26.5	27.9	31.4	32.9	43.1	34.6	32.7	
D/W平均値	1.1	1.3	1.5	1.3	1.9	1.3	1.4	
S (m ²)	LO-400	7(35.0)	24(30.4)	20(18.0)	5(11.6)	0(0.0)	3(13.6)	59(19.7)
	401-600	3(15.0)	26(32.9)	37(33.3)	10(23.3)	2(8.3)	3(13.6)	81(27.1)
	601-800	5(25.0)	13(16.5)	28(25.2)	11(25.6)	8(33.3)	4(18.2)	69(23.1)
	801-1200	3(15.0)	13(16.6)	19(17.1)	10(23.3)	12(50.0)	7(31.8)	64(21.4)
	1201-HI	2(10.0)	3(3.8)	7(6.3)	7(16.3)	2(8.3)	5(22.7)	26(8.7)
平均	608	578	662	847	886	990	627	
合計	20	79	111	43	24	22	299	

広く、800㎡を超えていることが分かる。各型の住戸数を見ると、III型が最も多く勝利村民家の約1/3を占め、IIがそれに続く。主屋1軒しか有しないI型と2軒の主屋を有するV型の数は最も少ない。

6. まとめ

本論文では、新賓満族自治県内の勝利村を対象に街路構成と宅地の関係及び家屋配置の統計により、得られた知見は以下の通りである。

- 1) 小規模の民家は一般的に村の中心地にまたは主要な道に接する所にある。一方、大規模の民家は一般的に主要な道と離れている。
- 2) 敷地の門と主屋入口について、地理位置の原因で長い冬が非常に寒い、保温のために主屋の入口は一般的に南向きである。従って便利性と考えると敷地の門もできるだけ南に設置されるが、敷地は南に道に接する民家が一番多いである。もし南に門の設置ができなければ、それに次ぐ西・東に設置し、西・東に道に接している民家が少なくない。一番よくないのは数が少ないの入口も門も北に設置する民家である。
- 3) 家屋配置形態について分類すると、I型からV型まで、副屋の数も多くなり、敷地の面積も大きくなる。

以上、本論では統計した村内にある各街路と宅地形状、面積、入口位置との関係を分析し、集落の空間特性を明らかにした。敷地の利用状況では、2017年10月に行った調査の目的であり、次の論文で報告する。

注

- 1) 赫図阿拉城は女真族の族長ヌルハチの本拠地で、満州語で「横の岡」を意味する。1616年にヌルハチはここで明朝からの独立を宣言し「後金」を建国しハーンへ即位した。1622年まで都がおかれた。

* 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程 建築学修士

** 山口大学大学院創成科学研究科 助教

*** 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

* Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

** Assistants Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for InNovation, Yamaguchi Univ., Japan

*** Professor, Graduate School of Sciences and Tec. for InNovation, Yamaguchi Univ., Japan